

簡文帝の文章観

——「湘東王に与うる書」を中心として——

森 野 繁 夫

梁書および南史の庾肩吾伝にのせる、簡文帝の「湘東王に与うる」書は、今日、簡文帝の文章観をうかがうことのできる数少い資料の一つとなっている。そのため簡文帝の文章を論ずる際には必ずとり上げられることになっているが、多くの場合、それは、彼の文章観が、「古人の文章を否定し、当代の文章を是とする」ものであることを証明するためのものである。しかし、私のみるかぎりにおいて、此の「書」には、むしろ逆の文章観が述べられているようである。すなわち、簡文帝は「古えの詩精神への復帰を説き、当代の文章を否定した」ものである、と。以下、「湘東王に与うる」書を中心として、このような簡文帝の文章観を再検討してみたい。

一

此の「書」は、簡文帝がまだ太子であったころ、弟の湘東

王繹（後の元帝）に与えたもので、梁書・南史の庾肩吾伝には、その間の事情が次のように記されている。「齊の永明中、文士の王融、謝朓、沈約は、文章に始めて四声を用い、以って新変を為す。是に至りて転た声韻に拘わり、弥いよ麗靡を尙び、復た往時に踰ゆ。時に太子は湘東王に書を与えて之を論じて曰く。」つまり、王融、謝朓、沈約らが詩に用いはじめた声韻に、当時の文人たちがこだわりすぎた結果、京師の文体はますます麗靡なものになってしまい、太子はこのような当時の状態を心配して、湘東王に「書」を与えて論じたのだという。この庾肩吾伝の記述によるかぎり、此の「書」は、声韻に拘りすぎた京師の文体に対する批判ということになるのであるが、「書」の内容をみると、声韻に関する言葉は、少くとも表面的には全く見られない。此の「書」と、庾肩吾伝にみえるまえ書きとの関係がはつきりつかめないのであるが、ここは一応、声韻の応用を契機とし、典故の乱用と前代文人の盲目的模倣とを直接の原因として、麗靡の風

がいよいよひどくなってきた京師の文体に対して、此の「書」が書かれたものと解しておこう。

さて、この「書」は、太子の近況報告に始まる。

私もまた遊びあるくこともせず、しらべものばかりしてありますが、生来 文章は好きなものだから、折にふれては短いものを作っております。まことにつまらないものですが、どうもこれだけは止められません。上手な人からみると、まったくはがゆくなるようでしょうが、あいも変わらず手はあがりません。

吾輩も亦た遊賞する所なく、ただ披閱を事とするも、性既に文を好めば、時に復た短詠す。是れ庸音と雖も、筆を閑くこと能わず。伎癢に慙づるあるも、更に故態に同じ。

どうも冒頭の文章が少し脱けているようであるが、それはさておき、太子はさっそく京師の文体批判にうつる。

ところで此の頃、都の人々の文体を見るに、そのしまりのないことといったら、おびただしいものがあり、われがちに浮わつた詩をまね、間のびのした詩ばかり作っているようです。冬の夜なかに、何とかいい句をとつとめてみて、これでは、できたものは「比」でも「興」でもなく、「風」「騷」には全くそわぬものです。

このころ京師の文体を見るに、儒鈍なること常に殊な

り、競いて浮疎を学び、争いて闡緩を為す。玄冬の脩夜、得ざる所を思ふも、既に比興に殊なり、正に風騷に背く。

京師の文体を「儒鈍」と評し、それが詩本来のものではないことを説いて、以下、そのようになった原因についてふれてゆく。

いったい六典三礼には、それぞれ施す所があり、吉凶嘉賓には、ちゃんと用い場所がある。私は情性を吟詠するのに、こともあろうに礼記の「内則」の篇に似せ、筆を操って志を写すのに、ことさら書経の「酒誥」の作をまねたり、また「遅々たる春日」の様子を詠むのに、なんと三易の「帰藏」の書きぶりをまね、「湛々たる江水」を歌うのに、はては礼記の「大伝」と同じ表現をする、といったことを、これまで聞いたことがありません。私は文章を作ることは拙いから、軽々しく是非を判断することはようしないが、それでも、当世の作品を昔の才人、すなわち遠くは楊雄、司馬相如、曹植、王粲、近くは潘岳、陸機、顔延之、謝靈運といった人達と比べてみるに、その言辞のつかい方、心情のはたらかせかたは、全く似ても似つかぬ有様です。もし今日の文章を是とするなら昔の文章は非であり、もし昔の文人達をほめるべきものとすれば、今日の文体は棄ててしまわねばならない。どちらとも認めるということは、どうしてもできません。

夫の六典三礼の若きは、施す所に則ち地あり。吉凶嘉賓は、之を用うるに則ち所あり。未だ情性を吟詠するに、反って「内則」の篇に擬し、筆を操りて志を写すに、更に「酒誥」の作に摸し、「遅々たる春日」は、翻って「帰蔵」に学ね、「湛々たる江水」は、遂に「大伝」に同じくするを聞かず。吾は既に文を為るに拙なれば、敢えて軽々しくは拮据すること有らざるも、但だ当世の作を以って、古えの才人の、遠くは則ち楊、馬、曹、王、近くは則ち潘、陸、顔、謝に歴方べて、其の遺辞用心を觀るに、了に相似ず。若し今文を以て是となさば、則ち古文は非たり。若し昔賢 称すべくんば、則ち今体 宜しく棄つべし。俱に盡各をなすは、則ち未だ之を取えて許さず。

これまで簡文帝の文章観をとり扱う際には、この部分をとりあげて、彼が、前人の「遺辞用心」つまり表現およびその根底にある心情には、今日の文章はともについて行けないことを表明したものと解し、簡文帝を当今の文人の代表者と考えてきた。たとえば、「この論断には、過去の優秀な文学表現法への断絶宣言ととるより、歴史的時間の發展変化を認識する立場に立って、梁代における文学表現の独自性を主張しようとする、いわば時代の文学的旗手を自覚する者の誇りがこめられている」——東方学27号「南朝放蕩文学論の美意識」林田慎之助——とあるのもそれである。

いったいこの書の中で行われている都の文体に対する批判においては、簡文帝は第三者の立場を占めており、楊雄以下謝靈運にいたる前代の文人は、批判の対象とされている都の文体との比較のためにとりあげられたものである。簡文帝は第三者として、前代の文人と当世の文人とを、その「遺辞用心」について比較し、古文を是とし今体を棄つべきものと考えているのである。つまり典故を巧みに用いることばかりに熱中し、情性の吟詠を忘れてしまっている当今の文人を非難しているのであって、このことは、この「書」の最後に、湘東王にむかって「(このように墮落した文壇について) 一共に商榷し、この清濁を辨じて涇渭の如からしめ、この月旦を論じて彼の汝南に類せしめん。」と、その建てなおしを呼びかけていることから明らかである。

さて太子は、都における文体が「儒鈍」となった原因を、もう一つ指摘する。

ところでまた謝康樂、裴鴻臚の文体をまねる者があるが、これもまたすぢちがいなことである。というのは、謝氏の詩は言を吐けば天にまで抜けとうる、といった天才的なものであって、時折くどいところが有るのは、その糟である。また裴氏は、史家としての才能はあるが、文章の美しさは全くない。だから謝氏をまねても、その精華ともいふべきものには手もとどかず、ただそのくだくだしさだけを得ることになり、裴氏を師とすれば、その長所にはふれる

こともできず、短所だけを得ることになる。謝の文は巧みではあるが、ついてゆけないものであり、裴についても、その質という点は見ならうべきではない。

そのようなわけであるから、一人合点の者、うわべばかりつくろつて内容は考えない者たちは、肉を仁獣に分け与えたり、びつこの御克を邯鄲にのさばらせるようなことをしており、まったく、塩づけの魚を売る店に入つて其の臭みを感じなくなり、尤められるようなことをまねて禍を招き寄せてしまう、という状態になってしまっている。

謝氏に従つたところで三千人の弟子の中へも入れはすまいし、裴氏に心服しても両唐の伝わらないことを懼れるくらいが関の山である。

また時に謝康楽、裴鴻臚の文に效う者あり、亦た頗る惑えり。何となれば、謝客は言を吐けば天に抜け、自然に出ず。時に、拘らざる有るは、是れ其の糟粕。裴氏は乃わち是れ良史の才、まったく篇什の美なし。是の為に、謝を学べば則ち其の精華に届かず、但だ其の冗長を得るのみ。裴を師とせば則ち其の長ずる所に蔑絶し、惟だ其の短とする所を得るのみ。謝は故より巧みなれども階るべからず、裴も亦た質なれど宜しく慕うべからず。

故に胸臆臆断の侶、名を好み実を忘るの類は、方に肉を仁獣に分ち、御克を邯鄲に逞しうす。鮑に入りて臭を忘れ、尤に效いて禍を致すなり。

羽を謝生に決するも、豈に三千に及ぶべけん。裴氏に伏膺するも、両唐の伝わらざるを懼るのみ。

以上、京師の文体について「用事過多」「謝裴両氏の模倣」ということをとりあげて批判した太子は、それを次のようにまとめる。

このようなわけだから、玉徽 金鈇のようにりっぱな歌は、かえって見る目の無い者どもに嗤われ、「巴人」「下里」といったつまらない歌がうけるのである。「陽春」のような格調の高い曲は人々に唱和されず、妙なる声は絶えたまま見捨てられてしまっている。その結果、今人は、文章の細かな点まで精密に検討し、文と質とについて深く考えることをしなくなつてしまひ、古人の巧心とは異なるものとなり、古えの妍手に顔向けならぬものになつてしまつた。したがつて、すぐれた才能の持主は、乱れてしまつた文壇をみて身をひいてしまひ、おり目正しい文章を愛する人は、卑俗な文章の横行する有様を見てため息をつくばかりである。

故に玉徽金鈇は反つて拙目に嗤われ、「巴人」「下里」は更に郢中の聴に合す。「陽春」は高くして和せられず、妙声は絶えて尋ねられず。竟に錙銖を精討し、文質を釐量せず。巧心に異るあり、終に妍手に愧ず。是を以つて、瑜を握り玉を懷く之士は、鄭邦を瞻て退くを知り、章甫翠履の人は、閩郷を望んで歎息す。

太子の、都の文壇に對する批判はここに要約されている。「竟に錙銖を精討し、文質を覈量せず。巧心に異るあり、終に妍手に愧ず。」巧心を持ち妍手であった前代の文人達に對して頗向けのならないものに、京師の文体は墮していると、太子は慨嘆する。

この部分についても、前述した林田氏の論文においては「ここには調子が高くても唱和されない詩歌より、握瑜懷玉の士、章甫翠履の士といった、儒学の教養高く礼節をわきまえた知識人達が、淫靡で野卑だと鑿鑿し背をむける民歌にあえて接近し、そこにあらわれた人間の裸の情性を汲みあげようとする簡文帝の姿勢をよむことができる。」と説明されるが、果してそうであろうか。

詩について苦言を呈してきた太子は、「筆」についても次のように言及する。

詩については以上述べたとうりであるが、文もまた同様である。墨はものが言えないままに紙を染めさせられ、紙は心が無いものだから、されるままになっている。

詩 既に此の若し、筆も又之の如し。徒だ煙墨もの言わざれば、其の駁染を受け、紙札情なければ、其の搖變に任す。

そうして、文章がこまでくずれてしまうとは、まったくひどいことだ。

甚しいかな、文の横流して一に此に至れる。

と言つて、京師の文体批判を結んでいる。そうしてこの後は、「このままではいけない、何とかしなければ」という、弟湘東王への呼びかけとなっている。すなわち、

近世の謝朓・沈約の詩、任昉・陸倕の文のようなのは、まことに最高級のものであり、作文の模範とすべきものである。張率の賦、周捨の辯なども、また佳い出来で、おいそれとお目にかかれるようなものではない。こうしてみると文章はまだまだ墮落しきつてはいない。きつとすぐれた文人がいるはずだ。それを引きつれてゆく者は、弟よ、おまえを措いて他にはない。私はいつもこのことについて語り合いたいと思つているのだが、いいおりがない。わが子建と一緒に当世の文章を検討し、その清濁をはっきりさせて涇水と渭水のようにし、その批評を、汝南の人物批評のようにやってみたいのだ。朱丹で点定したうえに雌黄で區別し、あの懷鼠たちに慙を知らせ、濫竿の輩を恥じ入らせてやりたいのだ。ちょうど袁紹が許劭に見られるのを畏れたようにし、あの牛盜人が王烈に知られるのを羞じたようにしてやりたい。とはいえ、会いたくても会えない今、私はほんとうにやりきれないのだ。

近世の謝朓、沈約の詩、任昉、陸倕の筆は、斯れ実に文章の冠冕にして、述作の楷模。張士簡の賦、周升逸の辯も亦た佳手に成り、復び遇うべきこと難し。文章は未だ墜

ちず、必ず英絶あらん。之を領袖する者は、弟に非ずして誰ぞ。毎に之を論ぜんと欲するも、与に語る可き無し。吾が子建と一共に商榷し、茲の清濁を辨じて涇渭の如からしめ、茲の月旦を論じて彼の汝南に類せしめん。朱丹もて既に定め、雌黄もて別あらしめ、夫の懷鼠をして慙を知らしめ、濫竽をして自から恥づかしからしめん。斯れを譬うれば、袁紹の子將に見うを畏れしがごとくし、牛を盗みし者の遙かに王烈に羞ずるに同じからしめん。相い思うも見えず、我が勞いを如何んせん。

以上見てきたように、太子綱の「湘東王に与うる」書は、情性を直接に吟詠することを忘れ、典故の使用に、また謝靈運、裴子野の文体の無批判的な模倣に心をくだく、京師の文人達の誤りを指摘し、弟の湘東王にその改革を呼びかけたものである。

太子の主張する「情性の吟詠」は、詩の「大序」のことばであり、また此の「書」の初めに「(京師の文体が)既に比、興に殊なり、正に風、騷に背く」と述べられているように、その志向するところは、詩経によって代表される古人の詩にあった。この「書」の主旨は、当時の、表現技巧の面にのみ心を用いた結果、内容の空疎なものになってしまった文章を、情性をのびのびと吟詠する古代の詩精神に本づいて改革しようとしたものであって、決して、古えの文人とその表現法と

を否定し、梁代における文章表現の独自性を主張したものである。太子は、表面を飾ることばかりに氣をとられ、しまりのないものとなってしまった当時の文体に、文章の限界、ゆきづまりを感じとり、情性をありのままに吟詠することによって内容を充実させる方向に、改革の道を切り開こうとしたものといえよう。この太子の意図は、その実りにいささかの偏りはあったにしても、六朝文学史上、特筆さるべき価値を持つものと言えよう。

ところで、詩経と、太子の文学運動の実りである宮体詩とは、一見そぐわない感じを与えるが、しかし「情性の吟詠」という面において両者は一つになる。情性の吟詠の延長線上に宮体詩は存在しているのである。ただその延長線上に在るのは宮体詩だけではなく、例えば「雄心」「思郷」の詩などもまたその一つである。太子にとって、情性をかきたてるものは、それが何であれ、すべて吟詠の対象であった。環境に触発された自己の感情を、何のたすけもかりないで、そのままじかに表現したものが文学であると考えたのであり、したがって、その情性が艶なる方向に傾けば、そこには必然的に艶なる詩が生まれ、また情性が雄心、郷思に傾けば、雄心の詩、郷思の詩が生まれるのは当然のことであった。

太子の、現存する数少い「書」の中に「郷思」「辺心(雄心)」ということばが夫々二度ばかり出てくる。

春庭の楽しき景に、風を承けて転らぐ恵。秋雨の且に晴れんとするとき、檐の梧初めて下つ。浮雲は野に生じ、明月は楼に入る。時に親賓を命びて、乍ち嚴駕を動かし、車渠のさかづきもて屢しば酌み、鸛鵲のさかづきを驟しば傾く、伊昔三辺に、久しく留まりて四もに戦い、胡霧は天に連なり、征旗は日を払い、時に塙笛を聞き、遙かに塞笳を聴くが如きに至りては、或は郷思。悽然と、或は雄心。憤薄たり。是を以て短翰を沈吟し、庸音を補綴し、目に寓め心を写し、事に因りて作る。(答張纘示集書)

この頃、旄を擁して西に邁き、載ち寒暑に離る。曉河いまだ落ちざるに、桂棹を払いて先ず征き、夕鳥は林に帰るに、孤帆を懸けて未だ息わず。辺心をして憤薄たらしめ郷思をして逴迥たらしむ。(与劉孝綽書)

すなわち、これらの書に述べられているような環境においては、「憤薄たる辺心」「逴迥たる郷思」が、吟詠さるべき情性としてとりあげられるわけで、それらを目にふれたまま心に感じたままに表現することこそ、太子にとっては文章の道であった。辺塞における雄心、郷思の吐露も、都の東宮における艶なる思いの表現も、情性の吟詠という立場からみれば同じものなのである。

二

しかし、この「情性の吟詠」も、太子にとってはあくまでも遊びの中の、つまり余裕ある生活の中においてのものであった。高祖、昭明太子、晉安王綱(簡文帝)、湘東王繹(元帝)、安成王秀、南平王偉らを夫々中心とする梁の文学集団の中において、遊戯的に生み出された文章には、表現方法に違いこそあれ、精神的にも肉体的にも、ぎりぎりのところにまで追いつめられた者の叫びはうかがわれない。生まれながらにして、この集団化され遊戯化された梁の文壇の一員であった太子が、いかにあがこうと、そういう文学環境から脱け出すことはできなかった。情性の吟詠を主張する太子ではあったが、その極限である心の叫び、魂のほとばしりを文章に表現することを説くまでに至っていないのはそのためである。

しかし太子にとって一度だけ、魂のほとばしりを文章に表わす機会があった。それは太清三年(551)、反将侯景が台城を陥し、大宝二年(552)、太子が永福省に幽閉された時である。太子は、側近の者から隔離され、賊兵の嚴重な監視をうけながら、やりようのない憤りを壁に板壁に書きつけた。紙などには無かったのである。先ず「自序」として、

梁の正士、蘭陵の蕭世績、身を立て道を行うこと、終始一なるが如し。風雨は晦の如く、鵝鳴は已まず。暗室を欺かざるに、豈に沉んや三光をや。数此に至る、命なり如何ん

せん。

と述べ、ついで数百篇の文章を書きつけた。その文章は、あまりに人の胸をうつものであったので、帝の殺害にあたつた男の一人によって、その大部分が刮り去られてしまったが、その場に居あわせた者が、その中の、連珠三首、詩四篇、絶句五篇を誦んじて後に伝えた。それらの文はいずれも「悽愴」なものであったというが、現在、広弘明集卷三十上に、詩一首、連珠三首がのこっているにすぎない。それは次のようなものである。

幽えられて志を述ぶる詩

悦忽として煙霞 散じ
幽風として松柏 陰る
幽き山に白楊は古り
野の路に黄塵は深し
終に千月の命無し
安んぞ九丹の金を用いん
闕里は長に蕪没し
蒼天は空しく心を照らす

(連珠) 一

吾れは聞く
古え富みて今貧しき有り

悦忽煙霞散

幽風松柏陰

幽山白楊古

野路黄塵深

終無千月命

安用九丹金

闕里長蕪没

蒼天空照心

吾聞

有古富而今貧

多より称りて寡を賑わす可しと
是を以って

度索は数しは下り

独り衰えし神あるのみ

松柏橋の南

空しく白社を余す

(連珠) 二

吾れは聞く

言は覆す可きなり

仁は能く物を育つと

是を以って

欲 其の礼を軽んずれば

徳の必ず昌る有り

兵 義を賤しめば

思いの服せざる無し

(連珠) 三

吾れは聞く

道行わるれば則ち五福俱に湊り

運閉ずれば則ち六極の鍾る所と

是を以って

麟出でて悲しむは

可称多而賑寡

是以

度索数下

独有衰神

松柏橋南

空余白社

吾聞

言可覆也

仁能育物

是以

欲輕其礼

有徳必昌

兵賤於義

無思不服

吾聞

道行則五福俱湊

運閉則六極所鍾

是以

麟出而悲

豈に唯に孔子のみならん
途窮して則ち慟くは
寧ぞ止に嗣宗のみならん

豈唯孔子
途窮則慟
寧止嗣宗

以上の、自序、詩、連珠に一貫して流れているものは、いかに身を慎しんでいても、一たび命運が尽きれば、どうにもならないものだ、という、諦めきれない諦めである。簡文帝にとって、このように幽禁という状態において文章を作ることになるうとは、思ってもみなかったことに違いないが、これらの文章を壁に書きつけながら、それまでの自己の文章観をどのように見たことであろう。情性の吟詠を主張し、その結果は「軽艶」とも「軽華」とも称される美しくなめらかな文章をつくりあげた彼にとって、幽閉中に作られた右のような作品は、それまで考えていた文章観で果して説明しうるものであったろうか。それはもう「情性の吟詠」ということばでは包みきれない断腸のうめきである。簡文帝の文章観、さらには当時の文章意識の限界はここに在るものといえよう。とはいえ、六朝の集団化され遊戯化された文学に、それを求めることが無理であることは言うまでもないことであって、簡文帝の復古運動も、当時の文学界の中において、情性を精いつばいに吟詠してやっとう宮体という実りをあげたのである。簡文帝にとってはそれで満足であり、それ以上のものは求めなかったに違いない。そのような簡文帝が、ただ一度の機会

に、自己の文章観を根底からゆさぶられたかどうか、「情性の吟詠」の窮極に存在する「魂の叫び」を感得しえたかどうか、何とも判断しかねる問題である。簡文帝が永福省に幽閉されたのは八月、土囊を積まれて四九歳の生涯をおえたのは十月のことであった。

三

ところで、太子の「情性の吟詠」に本づく文章観は、いったいどのようにして育成されたものであろうか。もちろんそれは、天監の初めから中大通三年にいたる約二十年間の晋安王時代に養われたものであるが、その間の彼に影響を与えた人として、鍾嶸、徐摛があげられる。まず「詩品」の作者である鍾嶸について見てみよう。

鍾嶸は宋の泰始四年(443)に生まれ、梁の天監十八年(549)に五十一歳で亡くなったようであるから、晋安王とのふれあいは、その末年における極めて短い間のことであった。すなわち天監十七年、西中郎将・領石頭戍軍事となった晋安王に記室として事えた、わずか一年くらいの間であったが、すでに「詩品」は完成されており、文章観も確立していた鍾嶸に、当時十六歳の綱は強い影響をうけたもののようである。すでに見てきた綱の「湘東王に与うる」書と「詩品」の序とを讀みくらべてみて、その主張のあまりの一致に驚く。

すなわち、太子の主張する「情性の吟詠」と「用事過多」との関係については、「詩品」の序には次のように述べる。

夫れ属詞比事は、乃わち通談と為す。乃わち経国の文符の若きは、応に博古に資るべし。撰徳 駁奏は、宜しく往烈を窮むべし。性情を吟詠するに至りては、亦た何ぞ用事を貴ばん。「君を思いて流水の如し」(徐幹) は即ち是れ即

目。「高台に悲風多し」(曹植) も亦た惟だ見る所のま。 「清晨に隴首に登る」(?) すなわち故実なし。「明月は積雪を照らす」(謝靈運) 詎んぞ経史に出でん。古今の勝語を觀るに、多くは補仮に非ず。皆 直尋に由る。

これは太子の「書」中の「未だ、情性を吟詠するに、反って内則の篇に擬し、筆を操りて志を写すに、更に酒誥の作に模するを聞かず」という主張と完全に一致する。

また前人の模倣について「詩品」の序に

次に輕蕩の徒あり。曹(植)、劉(楨)を笑いて古拙となし、鮑昭は義皇上の人、謝朓は今古独歩と謂う。鮑昭を師とするも終に「日中市朝滿」に及ばず。謝朓を學ぶも劣かに「黄鳥は青枝を度る」(虞炎)を得るのみ。徒らに自づから高聽より棄て、文流に渉る無し。

というのは、太子の「書」に、謝靈運、裴子野に倣う連中について、「謝を學べば則ち其の精華に届かず、但だ其の冗長を得るのみ。裴を師とせば則ち其の長ずる所に蔑絶し、惟だ其の短とする所を得るのみ。」とあるのに一致する。太子も

鍾嶸も、謝靈運、裴子野、鮑昭、謝朓について 其の全てを否定しているのではなく、彼らの詩を盲目的に信奉することをよくないこととするのである。模倣しても期待した成果はあがらず、かえって自己の性情の直尋な吟詠を阻害することになると説く。兩者にとって師として學ぶべきものは、性情の吟詠に忠実であつた文人およびその作品以外には無い。

以上の二つが、その主張における主な一致点であるが、要するに太子も鍾嶸も、性情の吟詠の妨げになる「用事」および他の文人の無批判的な模倣を強く否定し、更にそのような風にそまっている当時の文体を改めんとして、鍾嶸は「詩品」を作り、また太子は弟の湘東王に呼びかけているのである。

ただ声韻の説については、太子は鍾嶸のように真正面から否定はしない。梁書、南史の庾肩吾伝にある、「湘東王に与うる」書のまえ書き「齊の永明中、文士の王融、謝朓、沈約は、文章に始めて四声を用い、以って新変を為す。是に至りて転た声韻に拘わり、いよいよ麗靡を尙び、復た往時に踰ゆ。時に太子は湘東王に書を与えて之を論じて曰く。」というのによれば、太子は、人々が四声にこだわるあまり、詩の真の美しさを傷うことを心配しており、それがこの「書」の書かれた動機であるようにとれる。しかし「書」中には声韻については一言もふれておらず、逆に鍾嶸が「王元長 其の首を創め、謝朓、沈約 其の波を揚ぐ」といつている声韻説の大立物、謝朓、沈約の詩を「文章の冠冕、述作の楷模」と称

賛している。つまり太子にとっては、声韻のこまごまとした制約が情性の吟詠を妨げないかぎり、それほど問題にはならなかったようである。庾肩吾伝の「湘東王に与うる」書につけられたまえ書きは、「声韻」と太子の「書」とを結びつけすぎたきらいがあり、ここは、はじめに述べたように、声韻の応用を契機として、用事過多、前人の模倣など、表現技巧にばかり心を用いて弥いよ麗靡となった文風について「論じて曰く」とあるべきものと思う。

次に徐摛について。

摛は幼にして学を好み、長ずるに及び遍く経史を覽、文を属^つりては好んで新^お変を為し、旧体に拘わらず。家より起りて太学博士となり、左衛司馬に遷る。会^{たま}たま晋安王綱出でて石頭を成^もる。高祖は周捨に謂いて曰く「我の為に、一人の文学俱に長じ、兼ねて行いある者を求めよ、晋安と遊処せしめんと欲す。」捨曰く「臣の外弟の徐摛は、形質陋小にして、衣に勝^たえざるが若きも、此の選に堪えん。」高祖曰く「必ずや仲宣の才あらん、亦た其の容貌を簡^{かん}ばず。」摛を以て待説と為す。

以上が 梁書および南史の徐摛伝に記された彼の人の人となり、文章の傾向、簡文帝に仕えるにいたったいきさつである。このようにして晋安王集團の一員となった徐摛は、時に三六歳であったが、(晋安王は七歳)以後、南兖州—荊州—

江州—南徐州—雍州と移動する王府に随い、中太通三年(522)、昭明太子の薨去により皇太子となった主に随って中央に還り、大宝二年(531)、侯景によって永福省に幽閉された簡文帝に朝謁できないのを憤って卒するまで、その七八年の生涯の大半を簡文帝の側ですごしている。その間、「好んで新変を為し、旧体に拘らず」という個性的な詩風によって、簡文帝に強い影響を及ぼしつづけたわけである。

ところで「新変」とはどのような文体をいうのであろうか。庾肩吾伝に「齊の永明中、文士の王融、謝朓、沈約は、文章に始めて四声を用い、以て新^お変を為す。」のように用いられているところを見ると、「四声を用いた新しい文体」のようである。しかし徐摛伝に「摛の文体は既に別にして、春坊、尽く之を学ぶ。宮体の号、これによりて起る。高祖は之を聞きて怒り、摛を召して讓^{なぐさ}を加う。」とあるのによると、さすがの高祖も驚き怒るほどに艶なる文体を指すものでもあった。要するに「新変」とは、「旧体」に對することばであり、四声を用いた調子のよい文体も、艶なる文体も、その中に含まれていたものではあるまいか。

以上要するに、鍾嶸に学んだ「情性の吟詠」を基盤に、徐摛の、他に類を見ないほどに艶なる文体によってみがきかけられたのが簡文帝の文章であり、文章観であったといえよう。

もちろん、鍾嶸、徐摛のほか、庾肩吾、劉孝儀、劉孝威、劉遵、陸杲、江伯搖、孔敬通、申子悦、徐防、王固、孔鑠、鮑至らによって構成されていた配下の文学集団全体から受けた影響も見のがすことはできない。中央文壇の趨勢に左右されることの少い地方で、各自の個性をのびのびと發揮し、前代斉の延長ではない、新しい文学環境をつくりあげた人々がバックにあつてはじめて、簡文帝の文章観は生まれたものであるから、むしろ、鍾嶸、徐摛を含めた晉安王集団全体が、それを育てたと考えた方が当っているかも知れない。

注

- ① 詩経、南風、七月に曰う「春の日は遅々として、^{よそぎ}蓂を採るものは祁祁たり。」
- ② 楚辞、招魂に曰う「湛々たる江水、^{ほと}上に楓あり。」
- ③ 陸機の文賦に曰う「余 毎に才子の作る所を觀、竊かに以て其の用心を得るあり。夫れ其の言を放い^はまにし辞を遺ること、良に變多きも、妍蚩 好惡、得て言うべし。」
- ④ 「仁獸」とは麒麟のこと。公羊伝の哀公十四年に「麟は仁獸なり」という。生虫を履まず、生草を折らぬものといわれる。そういう獸に肉を分け与えたところで、どうなるものでもない、見当外れも甚しいことを意味するものであろう。
- ⑤ 郗克は春秋、晉の人。跋^はであつた。莊子秋水篇に、趙の都邯鄲の人々は歩行することが巧みであつたことが記されており、つまりここは、びつこの郗克が、歩行にかけては天下一の邯鄲を、大手をふつて歩いていることを云つたものであろう。
- ⑥ 劉向の説苑、雜言に曰う「孔子曰く、善人と居るは、蘭芷の室に入るが如し。久しくして其の香を聞かざるは、則ち之と化すればなり。惡人と居るは鮑魚の肆に入るが如し。久しくして其の臭を聞かざるは、亦た之と化すればなり。」
- ⑦ 左伝、文公元年に曰く「晉の文公の季年に、諸侯、晉に期す。衛の成公、期せず。孔達をして鄭を侵し、繇 晉および匡を伐たしむ。晉の襄公 既に祥し、諸侯に告げしめて衛を伐ち、南陽に及ぶ。先且居 曰く、尤に效うは禍なり。請う、君 王に朝せよ、臣は師に従わん、と。晉侯は王に温に朝し 先且居 晉臣 衛を伐つ。」
- ⑧ 陸機の文賦に曰う「^{よそ}溶く巧心に発すと雖も、或は^わ欬いを拙目に受く。」
- ⑨ 宋玉の対楚王問に曰う「客に郢中に歌う者あり。其の始めに下里巴人を曰うに、國中 属して和する者数千人あり。其の陽春白雪を為すや、國中 属して和する者数十人に過ぎず。」巴人、下里は卑俗な曲、陽春、白雪は高尚な曲の名。
- ⑩ 陸機の文賦に曰う「^{よそ}殿最を鑑録に考え、去留を毫芒に定む」。鑑も銖も微細な重さの称。
- ⑪ 楚辞、九章、懷沙に曰う「瑾を懷き瑜を握るも、窮して示す所を知らず。」また史記屈原伝にも「何の故に瑾を懷き瑜を握りて、而も自から放たれしむるを為すや。」とある。瑾も瑜も美玉で、人の美質をたとえた。
- ⑫ 礼記、楽記に曰う「鄭、衛の音は乱世の音なり。」
- ⑬ 蕭綱は自分を曹丕、湘東王を曹植になぞらえていたようである。
- ⑭ 後漢書許劭伝に曰う「初め許劭は（許）靖と俱に高名あり。好んで共に郷党の人物を聚論し、月毎に輒ち其の品題を更む。故に汝南

の俗に月旦評あり。

⑮ 尹文子、大道下に曰う「鄭人は玉の未だ理めざる者を謂いて璞となし、周人は鼠の未だ腊^{ひの}にせざる者を謂いて璞となす。周人 璞を懷きて鄭の賈に謂いて曰く、璞を買わんと欲するかと。鄭賈曰く、之を欲すと。其の璞を出して之に視^しすに、乃わち鼠なり。因^こつて謝^わりて取らず。」

⑯ 韓非子、内儲説上に曰う「齊の宣王 人をして竿を吹かしむるに、必ず三百人なり。南郭処士 王の為に竿を吹かんことを請う。宣王 之を説び、数百人に食を廩^あう。宣王死して、湣王立ち、一一之を聴くを好めば、処士 逃ぐ。」

⑰ 後漢書許劭伝に曰う「(劭) 初め郡の功曹と為るや、府中のもの操を改め行いを飾らざる莫し。同郡の袁紹は公族の豪俠なり。濮陽の令を去りて帰るや、車徒甚だ盛んなり。将に郡界に入らんとするや、乃わち謝して賓客を遣^さらしめて曰く、吾が興服、豈に許子将をして見せしむべけん。遂に單車にて家に帰る。」

⑱ 後漢書王烈伝に曰う「王烈は義行を以って称せらる。郷里に牛を盗む者あり。主これを得。盗は罪を請いて曰く、刑戮には是れ甘んぜん。乞う、王彦方をして知らしめざらんことをと。」

⑲ 詩、鄭風、風雨に曰う「風雨は晦^{やみ}の如く、鶏鳴は已ます。既に君子を見る、云^いに胡^なんぞ喜ばざらん。」毛伝によれば、君子が乱世にあつても操を改めめことをうたったものとする。

安東 諒
豊福 健二
畑野 武司

校字